

漢詩を味わう

第161回

冬夜寄温飛卿
とうやおんひけいによせる

魚玄機
ぎよげんき

苦思搜詩灯下吟

苦思 詩を搜す灯下の吟

不眠長夜怕寒衾

不眠の長夜 寒衾を怕れる

滿庭木葉愁風起

滿庭の木葉 風の起るを愁い

透幌沙窓惜月沈

幌を透す沙窓 月の沈むを惜しむ

疏散未閑終願遂

疏散未だ閑ならざるも 終に願いを遂げる

盛衰空見本来心

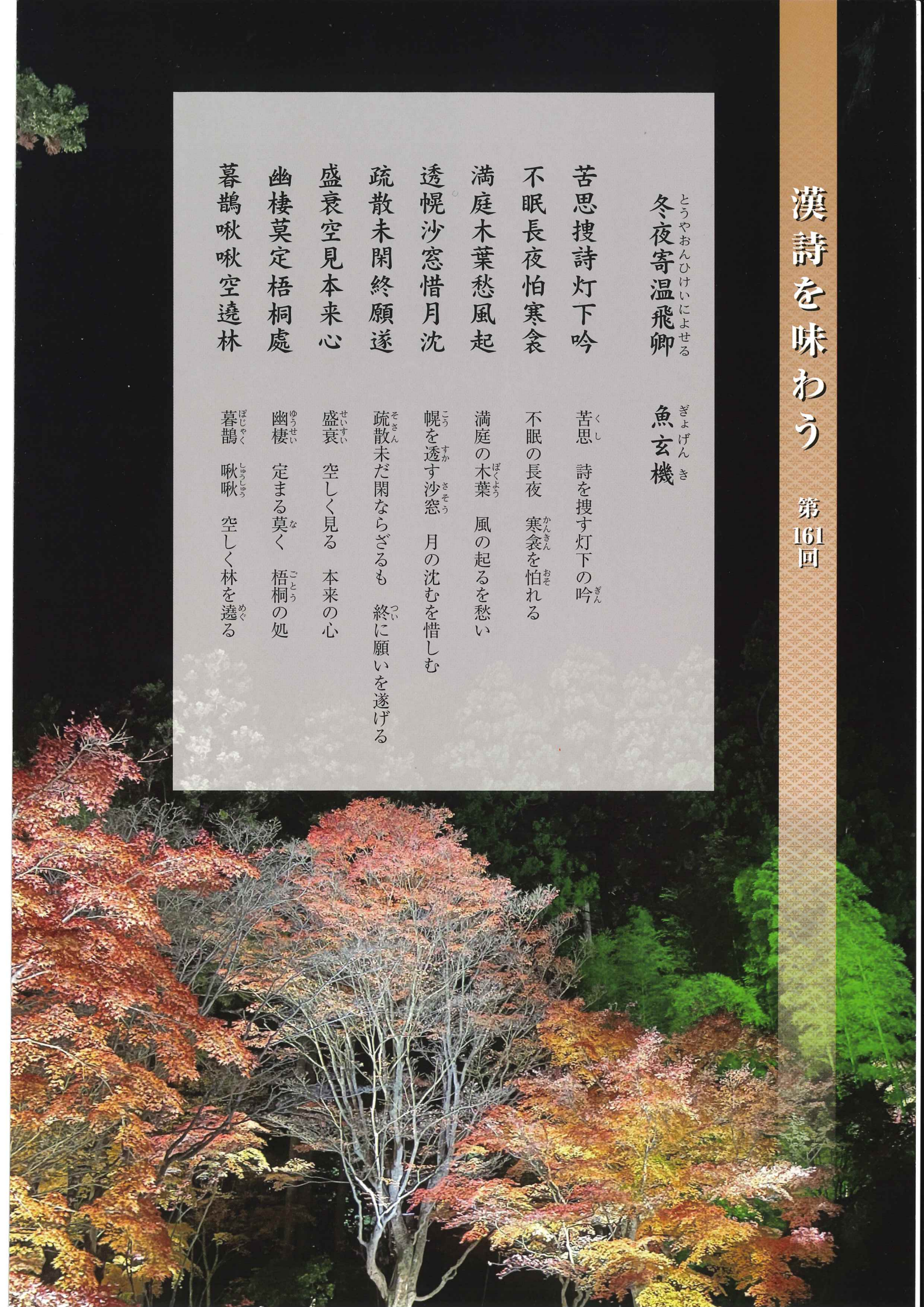
盛衰 空しく見る 本来の心

幽棲莫定梧桐處

幽棲 定まる莫く 梧桐の処

暮鵲啾啾空遶林

暮鵲 啾啾 空しく林を遶る



詩をつくるのにいろいろ思いを巡らし、灯火の下で口ずさんでは修正していただきます。

この頃なかなか眠れない夜長の冬ですが、布団に入っても寒さに震えてはいませんか。

庭一面の枯葉は風が吹いたら音を立ててはい回るでしょう。

カーテンの向こうに薄い紗を張った窓から月光が差し込んでいますが、その月も沈むと一人ぼっちになってしまいました。

疎まれてあの人とも別れてしまいました。といっても全く人との交際を絶つたわけではなく、願ひ通りに道士の生活にはいることができました。

楽しく暮らしたころと彼に棄てられた今の生活。この変化を通して気が抜けたように自分の本心を見つめています。

まだ誰かの妻として、おちついた静かな暮らしにはいることが出来ないでいます。

暮れの鶺鴒かささぎがねぐらを求めて哀れに鳴きながら林のあたりをめぐっています。ちようど今の私のように。

《温飛卿》 晩唐の代表的詩人、温庭筠。

《搜詩》 詩を作るにあたっていろいろ思いめぐらすこと。

《幌》 とばり。カーテン。

《沙窓》 沙はうすぎぬ。さわめて軽く薄い織物をはった窓。

《疏散》 疏はうとんぜられること。散はわかれること。

《盛衰》 盛は李徳の妾として楽しかったころ。衰は別れたあとの現在。

《幽棲》 幽はしずか。俗事に動かされずおちついた生活。

《梧桐》 あおぎりは井戸の脇によく植えてあることから、処を定め一家の主婦として暮らすことをいったもの。

魚玄機は晩唐の人。中唐の薛濤せつたうとともに中国屈指の女性詩人です。魚玄機は長安の妓楼の養女でしたが、その拔群の詩才によって名士の注目を集めました。十八歳で素封家の御曹司李徳りやくに見込まれて側室になります。李徳は弘文館学士から補闕ほけつという要職の官僚でしたが放蕩者で、二年足らずで離別し、魚玄機は長安の名高い道教寺院、咸宜觀かんぎくわんに入り女道士となりました。やがて、新しい恋人もできませんが、最初の挫折が尾を引いて猜疑心の塊となった彼女は、恋人と侍女の仲を疑い、ついに侍女を殺害して逮捕され処刑されます。ときに二十六歳。大胆にして女性特有の情感を詠う数々の詩を残していますが、不幸の極みという形で短い生涯を終えています。

この詩は、同時代の名詩人温庭筠おんていこんに寄せた詩です。魚玄機は三十二歳年上の温庭筠と妓楼で出会いその詩才を認められて引き立てられます。そして魚玄機は温庭筠に畏敬の念を懐き終生心の拠り所としていました。

李徳が魚玄機を知るきっかけは、友人だった温庭筠の家で魚玄機の詩稿を目にしたことからとも伝えられています。李徳は側室となった魚玄機を伴い任地に旅立つ折、温庭筠は「春日、岳州の従事李員外じゅうりゅういんがいに寄す」と題する詩を李徳に贈っています。その一節に「蝶、高く飛ぶに伴あり。鶯、早

に語雙なごびなし。」とあります。蝶は李徳のことで、魚玄機という愛妾を伴い榮転先に行くのは幸せだな。と言ひ、更に鶯は魚玄機を指し、その詩は並ぶ者がいないとその詩才をほめています。

しかし、その任地に李徳の正妻が訪ねてきて「夫人妬として容る能あたわず。」(唐才子伝)というところで、魚玄機ひとり長安に返されてしまいます。

この詩は李徳と別れて女道士となり寂しい冬を過ごすなかで詠まれたもので、その心境を詩に託して温庭筠に寄せたものです。

森鷗外は彼女の生涯を題材にして「魚玄機」という小説を書いています。唐詩人の伝記集「唐才子伝」などをもとに脚色し、彼女の生の軌跡を美しく描いている小説です。

素性の知れない幼女が長安の色街に売られ、当時の官僚社会で大きな役目を果たしている「詩」を金のなる木の道具として身に付けたために、妓楼は大金を手にしたことでしょうか、魚玄機は短命で憐れな一生でした。女性の地位が無いに等しい封建中国の犠牲者ともいえます。せめてもの救いが、その詩才が屈指の女性詩人として今まで語り継がれていることです。

参考文献・漢詩大系「魚玄機・薛濤」(集英社)・森鷗外全集5「魚玄機」(筑摩書房)

千山鳥飛ぶこと絶え
万径人蹤滅す
孤舟蓑笠の翁
独り釣る寒江の雪

千山鳥飛絶
万径人踪滅
孤舟蓑笠翁
独钓寒江雪

《大意》どの山にも飛ぶ鳥の影は絶えて、どの小道にも人の足跡は消えた。蓑笠をつけた老人が、雪の降りしきる川面に、ひとり釣り糸を垂れている。

(柳宗元詩・江雪)

胡風は朔雪を吹き
千里竜山を渡る

胡風吹朔雪
胡風吹朔雪
千里度龍山
千里度龍山

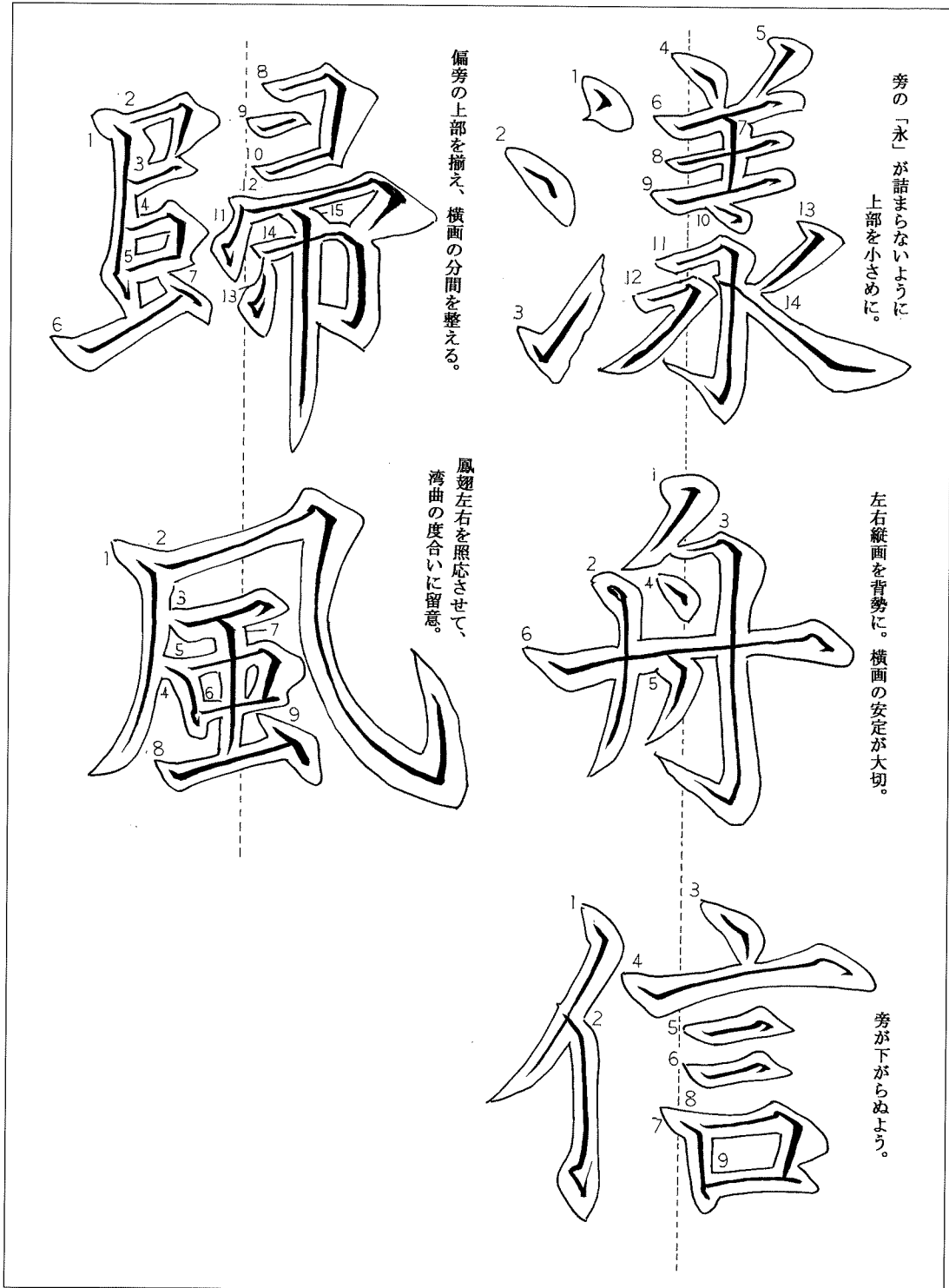
《大意》遠く胡の地に起こった風は、北方の雪を吹き散らして、千里の彼方あの凍てついた竜山をも超えて吹き寄せてくる。

(鮑照詩「学劉公幹体」一節)

読み
舟を漾たぎわせて
歸風まかに信す
(舟を浮べ風の向くままに任せる)

漾舟信
歸風

佐藤象雲書



偏旁の上部を揃え、横面の分間を整える。

旁の「永」が詰まらないように
上部を小さめに。

鳳翅左右を照応させて、
湾曲の度合いに留意。

左右縦面を背勢に。横面の安定が大切。

旁が下がらぬよう。

- 一般部規定課題出品について
- 規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
- 初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
- 規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」
(前半)

落日山水好

落日 山水好し

漾舟信歸風

舟を漾わして 歸風に信す

玩奇不覺遠

奇を玩んで遠きを覺えず

因以緣源窮

因りて以て源を縁ねて窮む

遙愛雲木秀

遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同

初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉

安んぞ知らん 清流轉じて

偶與前山通

偶々前山と通ずるを

捨舟理輕策

舟を捨てて輕策を理む

果然愜所適

果然として適する所に愜う

老僧四五人

老僧 四五人

逍遙蔭松柏

逍遙して松柏に蔭う

(後半に続く)

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

送舟信 歸風

次号課題

隸書

遊舟信 歸風 玩奇不 覺遠

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

もてあそ 奇を玩んで遠きをおぼえず

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
ともかきも					
あなた任せのとの暮					

小林一茶

和泉溪石先生書

飽飫烹宰飢厭糟糠
 飽飫烹宰飢厭糟糠
 飽飫烹宰飢厭糟糠

佐藤象雲書

音

ホウヨホウサイ
キエンソウコウ

略解

腹が満ちていればご馳走も食べたくないし、
腹が減っていれば粗食でも好んで食べる。

善
以
縁
昇
昇

善は縁を以て昇る

善
以
縁
昇
昇

象雲臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序 (初唐・西暦六五三年) の臨書 (69)

『善以縁昇』

この一節は太宗が經典を西域から持ち込んだ玄奘法師の功績を讀えた後に、仏教教理の概略を述べた部分で、一番核心に位置付けるべき内容だと思えます。「悪行をなせば悪行によって墜ち、善事をなせば善縁によって生まれ変わる。」ということ、このあとに知覚を持たない高嶺の桂と水中の蓮を例に喩えて述べています。

【善】 書写体で、長い横画の下にノと口を書いている。平静な横画に対して、口は縦画の打ち込みを強くして安定させる。
【以】 中心を広く空ける。左の密に対して右は左払いを暢びやかに。

【縁】 非常に美しい結体で、躍動感がありながら緻密に各線が響き合って優美。旁の下部の各線の構成が大切。

【昇】 下部の横画を右上がりにすることによって、字に動きを出している。これに続く字も同じ「昇」だが、結体が異なり、また、後世に修正された線が見える。参考まで、右上に掲載した。

草書 子 乖 使 轉 不 能

■孫過庭・書譜（初唐・西曆六八七年）の臨書

(50)

草は使轉に乖そむけば（字を成すこと）能あたわず

象雲臨

草書 子 乖 使 轉 不 能

『草乖使轉不能』

今回も前段から一連の文章の中の一節です。孫過庭は楷書と草書の表現法の違いを、点画と使轉、形質と性情という相対する言葉を使って論じています。前回の「楷書は一点一画が形の本質をなし、筆の運びで性情をあらわす。」に対して「草書は点画を以て性情と為し、使轉を形質と為す。（草書は逆に一点一画の置き方で性情をあらわし、筆の運びが形の本質である）」としています。そして「草書は筆の運びを疎かにすれば、字を成すことは出来ない」と孫過庭は結論付けています。これは非常に納得のいく理論で、初学の段階では、草書の崩し方、書き方を覚えるために草書体という形から入りませんが、草書作品の良し悪しは、形の良し悪しではなく、筆の運びです。

さて今回は六文字です。「使轉」の二文字はこの文節だけで三回目の登場で、孫過庭は意識していることか判りませんが形がすべて異なっています。今回特に注目したい部分は、「乖」が中心線を前傾させているのに対して「使」を後傾させていることです。筆の運び、気脈に留意しながら臨書してください。